

序文

2011年および2018年に「〇年前の常識は現在の非常識」と銘打った増刊号を企画した。その目的は、診断や治療法の変化が著しく速い眼科領域において、短時間にその変化を理解して眼科知識をアップデートしてもらうことであった。対象はすでに一定の知識を得た中堅眼科医であり、日々の臨床や管理業務で十分に学習時間が取れない医師を助けることができればと考えていた。この試みは好評を博し、多くの方に購読していただいた。そこで今回、同じ目的で「6年前の常識は現在の非常識！—AI時代に向かう今日の眼科医へ」というタイトルで新たに企画することとした。

さて、この間にも眼科医の情報取得方法について大きな変化があった。まず、情報収集のソースが大幅に変化したことが挙げられる。動画を用いた手術法の学習は当たり前になり、情報取得方法もインターネットを通じたものが主流になった。しかし、そのことについて大きな懸念がある。

1つ目が、情報の正確さである。医学出版社を中心とした書籍あるいは学術情報は、厳しい評価を経て出版されており大きな誤りはないものが多い。いわゆる怪しい著者による怪しい書籍が出版されても、読者数は限られ情報の拡散も限定的である。しかし、インターネット上の情報は、正確な情報を提供するというよりも、自己宣伝あるいは肯定的評価者数を増やすだけの目的で作られたものが多い。特に医学情報の評価には、読者側にも相応の知識が求められるので、真実を語る記事よりも読者に好まれる「柔らかい」記事のほうが、高い評価を得やすいという問題がある。残念ながら、多くの医師はこのような事情を知らずにインターネットから情報を得ているのが現状である。これが、趣味や娯楽の世界であれば許容されるであろうが、人々の命に直結する医学情報ではそれは許されず、きわめて危険である。自分の治療でうまくいかなかったとき、その知識の根拠がインターネットであったということになれば、医療者側の責任はきわめて重くなる。本書の内容は、現時点の医学界で認められた情報を、斯界の第一人者が解説されたものであり、インターネット情報に比べて格段に信頼できるといえる。

次に重要なのは、本書は読者が本来興味のない領域でも、取得すべき情報を読者に提供することができるという点である。最近のインターネットは人工知能を用いて読者個人の嗜好解析がなされており、一度記事を閲覧するとそれに関連する情報が集中的に送られてくる。自分が興味をもつ領域以外で、重要かつ革命的变化が起こっても、インターネットのみに頼って知識を得ていたら、他領域の情報を見落とす危険性が高い。これは新聞とインターネット情報の差として最近注目されていることである。新聞情報はインターネット情報より、情報の新しさという点では劣ることが多いが、読者が気づいていない点についても情報が提供されるという大きな利点がある。眼科という比較的狭い領域においても、例えば網膜の専門家が涙道診療における最新情報を常に把握することは困難であろう。しかし、本書のタイトルをみるだけでも、専門領域以外の変化が起こっていることを知ることができるのである。

患者側が受診する際には、眼科医は常に眼科の最新情報をもっていると期待している。繰り返しになるが、日常診療で多忙な眼科医がそれを達成することは、現実的には困難であろう。現在の眼科医療の中心である中堅眼科医が、確実に眼科情報をアップデートできれば、患者側や社会にとって大きな福音になる。本書がそのための一助になることを祈念する。

坂本泰二（鹿児島大学）